

2023 年度ぶどうの実障害児通所支援事業自己評価

1 職員による自己評価

管理者、児童発達支援管理者、児童指導員、保育士等 6 名が回答した。

(1) 環境・体制整備

- ・療育室については狭いため、自由時間に遊ぶ際に危険を感じる事があるが、3階ホール(約105㎡)の活用や外出等の活動の組み合わせ、学年で活動曜日を分ける等の工夫をした。
- ・職員配置について、職員の休暇などを踏まえると少ない人数で対応せざるを得ない。

(2) 業務改善

- ・送迎について、置き去り防止システムを導入した。又、昨年度利用児童の学校での引取りミスに関する事故があり、確認手順の改善、スマートフォン2台を導入し連絡手段の改善を講じた。
- ・保護者との連絡手段を連絡帳による筆記式から携帯アプリ「コノベル」を導入した。ペーパーレス、業務の効率化、職員間の情報共有及び保護者への確実な情報提供が期待できる。
- ・研修の機会について、事業所内権利擁護研修の他、横浜市による虐待防止研修などに参加した。嘱託職員に対して、権利擁護、身体拘束に係る内部研修を実施している。今後も嘱託職員も含めた研修の機会を増やしていきたい。

(3) 適切な支援の提供

プログラム、支援計画)

- ・集団活動を主に、個別支援計画に基づく個別の課題に対してのプログラムを実施している。プログラムは、特定の療育プログラムに基づく物では無く、ADL やコミュニケーション面での個別の状態に合わせ、日常場面において個別支援を実施した。
- ・高学年、低学年により曜日を分ける事により、より年齢に応じた日課を提供したが、反面利用日に制限を設ける事となった。
- ・個別支援計画に沿った着目ポイントの共有し生活場面に即し実施しているが、課題プログラム等の個別の支援があまり実施できていない。

チーム連携、打ち合わせ)

- ・サービス開始前の打ち合わせについて、その日の現場の状況によっては行えていない事やサービス終了後の打ち合わせが出来ていないため、「コノベル」の活用等工夫する必要がある。

(4) 関係機関や保護者との連携

- ・本年度、医療的ケア対象児童の受け入れは無かった。施設内看護師と連携し必要な情報を保護者経由で確認している。
- ・就学前に利用していた児童発達支援事業所や幼稚園等との連携はしていない。現状利用している他機関と必要に応じてカンファレンスや連絡を取り情報を得ている。
- ・学校とのつながりについて、送迎時の様子引継ぎの他、状況によって、相談支援機関や医療機関等関係機関を含めたカンファレンスを実施し情報共有や支援を実施した。

- ・障害のない子どもたちとの交流はほとんどない。
- ・旭区社会福祉協議会こども連絡会に参加し地域の協力、同業者等の連携に努めた。

(5) 保護者への説明責任等

- ・利用日の送迎時や定期的な面談、必要に応じての電話連絡等、個別での情報伝達、交換は頻繁に行われており、意思疎通は図られている。
- ・本年度、保護者の参加プログラムとしては法人内の生活介護事業所での体験（だるまづくり）を計画したが、コロナウイルス発生により実現出来なかった。保護者交流の場へのニーズもあるため、保護者の参加する機会は次年度も積極的に設けていきたい。
- ・コロナウイルス 5 類化に伴い、夏まつり、感謝祭といった地域開放した行事を再開し、児童の参加や、保護者の方が施設を知る機会を設ける事が出来た。

(6) 非常対応

- ・コロナウイルス、インフルエンザなど、感染マニュアルに基づき状況の把握や予防、保護者への連絡を実施し、感染を最小限に抑える事が出来た。
- ・積雪や台風等の荒天時は、直前の判断となり、当日の日中に保護者へ連絡する事になった。
- ・怪我や体調不良に等医療面では、入所部門と兼務している看護師が医療面での緊急対応をしている。
- ・緊急時に併設されている入所施設の職員の応援を依頼できる。

(7) その他

- ・児童発達支援について、2名の児童が利用した。人数が少なく個別に援助出来る一方学校休業日には放デイ利用者と同じ日課になっている。

2 保護者による評価

利用契約者 22 名中（うち児童発達支援 2 名）、19 名（うち児童発達支援 2 名）の保護者から回答をいただいた。

回答からは、全項目において不満、不備等の否定的な回答はなかった。

ほぼ 8 割以上の保護者から満足している回答をいただいた。

(1) 環境・体制等

- ・概ね不満の無い回答であったが、環境や人員配置について実際の活動を見ていないので評価できないとの意見もあった。

(2) 適切な支援の提供

- ・おおむね満足しているとの回答だが、療育と考えると時間が短く少し物足りない。との意見があった。

(3) 保護者への説明等

- ・面談や、送迎時他、こまめな連絡で安心している。
- ・活動概況、苦情、非常時対応等、情報として足りないと感じる。

(4) 非常時の対応

- ・感染時等の対応に不備は見られず、おおむね「満足」といった評価であった。

(5) 満足度

- ・概ね子どもは満足している。
- ・保護者としても安心して預けられる状況であるが、「療育といった面で満足とは言えない」といった意見があった。

3 事業所内での分析

(1) 事業所と保護者との共通評価

- ・昨年度迄、挙げられていた療育室が狭い事について、3F ホールでの活動等のスペースの有効活用や、外出等の工夫、曜日によって学年を分ける等活動内容の整理が出来た事が環境改善に繋がった。
- ・コロナウイルス5類化により、集団や外への活動が安心して出来てきている。感染症発生時の連絡や対応等が定着してきた。
- ・保護者への負担配慮として、短期入所、日中一時支援などの障害福祉サービスを活用した家庭支援も行っている。

(2) 評価が相違している点

- ・アンケート結果では明らかな相違点は見られない。
- ・保護者への説明等、日々の連絡や面談、会報誌、ホームページ等で伝えているが、活動内容や中での状況が分からないといった回答がある。
- ・活動の様子は面談や送迎時の口頭や、広報誌等、重要事項説明書等で伝えているが、内容が分からないといった意見がある。保護者の活動見学や参加、懇談会といった事業所としての報告の場、保護者交流の場等を設ける事により幅広く周知出来るのではないか。

4 事業所の強み

- ・入所施設、短期入所事業、日中一時支援等を実施しており、総合的な支援を提供できる。
- ・生活に即した日課で、各季節感のある行事や創作、調理やゲーム、学習課題、学校休業期間には外出等を多く取り入れ、社会体験の他公共機関の利用や金銭学習等幅広く多くの体験、経験の場を提供している。
- ・必要なときに必要な職員の応援を補充できる。
- ・法人としてのスケールメリットを活かすことができる。日中活動事業所への体験等の活動が出来る。
- ・長い法人としての歴史が地域の根付いており、様々に意見や苦情等が地域から入る。
- ・施設設備、備品等を施設全体で共有できる。
- ・入所児童との交流が図れる。

5 事業所の改善点

- ・保護者が事業所に足を運び活動を見て事業所の支援を知る事や、保護者間交流、事業所の情報提供等が足りていない。

- ・支援のための十分な職員が確保できていない。
- ・指定基準に則った人員配置をするための収支が逼迫している。
- ・また、法人内の職員採用形態として、夜勤を含む交代勤務ができない職員や時短職員が通所型施設に配置されることが多い事や、年々高まる人材不足による欠員補充が難しくなっている。
- ・児童発達支援事業と放課後等デイサービスの多機能型事業所であるが、バランスの良い定員割合にならない。特に、児童発達支援の割合が少なく放課後等デイサービスが多い。

6 事業所の改善の取り組み

(1) 個々のニーズに見合ったサービスの提供

- ・高学年と中低学年の利用日を分け、年齢に応じた活動を実施した。これにより年齢に即したニーズへの対応及びスペースの活用課題も整理する事が出来た。反面曜日により全日利用が難しくなった。高学年の利用検討や、年々利用児童の学年バランスも変化するため今後も個別のニーズを満たす利形態を模索しいていく。
- ・本来児童発達支援との多機能事業所としているため、放課後デイサービスと児童発達支援利用のバランスを考える必要がある。

(2) 保護者への関わり

本年度、親子活動の計画を立てるも感染症の影響で実施出来なかったが活動内容や環境、体制等を知ってもらうための親子活動の場や、懇談会等の情報提供、親同士の交流の場の設定を検討していく。これにより事業を幅広く知ってもらい、他項目も含め理解を得ていく。

(3) 特化したサービスの提供

法人内のスケールメリットを生かし、職場体験や保護者見学等、法人内事業所を活用していく。

(4) 地域に根差した事業展開のために

コロナウイルス 5 類化に伴い施設行事等による地域開放の再開や、併設する障害児入所、短期入所や日中一時支援事業、子ども食堂等も連携連動し、地域生活を支える事業を展開していく。

2024年3月

事業所名 社会福祉法人白根学園 ぶどうの実

担当者 施設長 鈴木 透